

生懸命文章を書こうとして情報を集めていたことがわかる。教師からではなく友だちからヒントを得たことは集団で学習するメリットのひとつと考えられる。友だちから学ぶことはわかるための大事なポイントであり、このような場面を教師が意図して設定していきたいと思った。

かべ新聞作りを繰り返し学習すること、昼休みの発表をいれたことで活動がわかり、意欲も十分な彼女であるが、文章を書けば脱字や平仮名がまだ多いという課題は残っている。もっと細かい部分でどうわかるようにしていけばいいのか模索中である。

(竹内 君江)

事例 5 国語・数学「分ける活動から片づけ活動へ」

(1) 生徒の実態

本グループは、1年生2名、2年生1名、3年生1名の計4名で構成されており、担当教師は2名である。このグループは授業を始めるにあたり、教室に生徒を集めることに時間を要する。教師1名が教室で生徒を見るために残り、もう1名が他の生徒を集める体制をとっているが、集めているうちに教室から生徒が出歩き教師がついて行く。すると教室が無人になってしまったりする。いざ授業が始まっても教室のベランダの水道で水遊びをする生徒や、広いグラウンドへかけていき自転車に乗り始める生徒、別の教室「憩いの部屋」で音楽を聴き始める生徒が出てきて、教室には生徒が1名か2名ということもしばしばである。しかし、繰り返し行ってきた学習には見通しをもち落ち着いて取り組む生徒や、ギター伴奏による「歌」が聞こえた途端に教室に来る生徒、「歌」に合わせて大きくリズム良く体を動かす生徒もいる。その日の体調や気分によって活動に対する生徒の姿勢が大きく違うこともこのグループの特徴である。

(2) 教材観

本グループの生徒の保護者や担任の願いには「落ち着いて学校生活を送ってほしい」「穏やかに過ごしてほしい」などが多い。この願いを受けて本グループでは、「生徒が物や人とかわかり、そこに教師と一緒に活動することで互いにコミュニケーションとっていく」ことをねらいとした。

そこで生徒が見通しがもて、集中しやすいように「歌」や「分ける」活動、「片づけ」活動、「遊び」などのいろいろな活動を組み立てて授業を構成している。「歌」は授業の始まりの合図として行うとともに、生徒が思いきり体を動かしたりリズムをとったり、気持ちを開放し学習に入りやすい雰囲気作りのため取り入れている。野菜や果物の実物や絵カード、文字カードを「分け



「洗剤いれた」

る」活動は生活において根付いた内容であり、生徒が見てすぐに分かりやすい活動である。また「分ける」活動をより生活に生かし、家庭でも保護者と一緒に取り組めると思い洗濯物や玩具、履き物などの「片づけ」活動を取り入れた。「遊び」では生徒と一緒に教師が楽しんで遊ぶことで、互いにコミュニケーションをもっとうまくとることをねらっている。さらに生徒が教室内外を問わず思いきり遊ぶことで、気持ちの発散や安定もねらっている。

(3) わかる状況作り

①授業の流れ

生徒が活動に見通しがもちやすいように、授業は毎時間、同じ流れで行ってきた。活動内容は以下の通りである。

- | | | | | | | | | |
|------------------------------------|-----------|------|-------------------------|--|---|---------|--|--------|
| 活動内容 | } | ①・歌 | | | | | | |
| | | | ・歌にあわせて黒板に線を書く、マグネットを貼る | | | | | |
| | | ②分ける | ・色で分ける (ブロック・カラーボール) | | | | | |
| | | | ・形で分ける (スプーンとコップ など) | | | | | |
| | | | ・野菜・果物を分ける | <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="font-size: 2em; vertical-align: middle;">{</td> <td>絵カードと実物</td> </tr> <tr> <td></td> <td>絵カード同士</td> </tr> <tr> <td></td> <td>文字カード同士など</td> </tr> </table> | { | 絵カードと実物 | | 絵カード同士 |
| { | 絵カードと実物 | | | | | | | |
| | 絵カード同士 | | | | | | | |
| | 文字カード同士など | | | | | | | |
| ③片づけ (2学期から; 履き物・ランチョンマット・雑巾の洗濯など) | | | | | | | | |
| ④遊び (2学期から; ビー玉転がし・布裂き・バルーン など) | | | | | | | | |

②教材について

「歌」では生徒がよく口ずさんでいる歌や、聞くと体を動かしている歌を取り入れてきた。また生徒が歌いたい歌を選べるようにと、絵カードやVOCAを活用してきた。

生徒が何度も繰り返し行ってきた「分ける」活動では分けるものの形を変えたり、少しずつ量を増やしていったりすることで、自分で考える場面を多くし生徒が試行錯誤することをねらった。ブロックやカラーボールでは、はっきりと違いが分かりやすい色(赤・青・黄色 など)を選んだ。さらに生徒がよく見て知っており、比べて形や色などの違いが分かりやすい、みかん・バナナ・にんじん・びーまん などの果物や野菜カードを選んだ。時には買い物へ行き、実際に実物を見て味わうことにも取り組んでいた。

履き物の「片づけ」ではズック・スリッパ・長靴など、すぐにペアが作りやすい履き物を選び、生徒の目線の高さに履き物入れを用意することで、片づけやすい状況を作った。また生徒の学校生活を考え、玄関の履き物入れ



「雪やこんこ」

にスリッパを入れていく活動を行ったり、洗濯室で洗濯をするなど実際の場所に行ってしまうということも大切にしてきた。

「遊び」では教室に生徒が興味・関心を示しそうな手作り玩具を用意したり、バルーンやはた織りに活用する布裂きをしながら楽しんだ。時には生徒が教室ではなく居心地の良い音楽室に行くときは、そこで授業を行い楽器で遊ぶなど、教室外での活動も取り入れ生徒に応じて内容を変えてきた。

③教師の体制

本グループではティームティーチングの体制をとっている。授業を進める教師、教室を出歩く生徒につく教師、など生徒の動きに合わせて教師の動きを臨機応変に決めてきた。またなるべく1対1のかかわりをし学習が深まるように、そしてその時の生徒の気分や体調を考慮しながら動いてきた。

(4) 指導の実際

① T男について

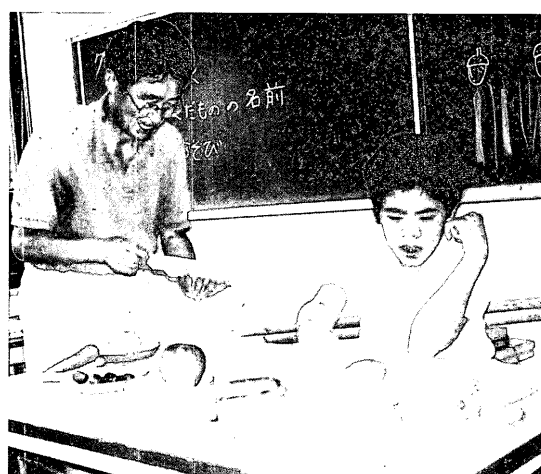
T男は童謡が大好きで、休み時間やちょっとした時間の合間にもCDデッキから流れる童謡に耳を傾けている。

1学期、「歌」ではじっとギターの方を見つめ耳を傾けていた。たまにリズムにのって小さく口ずさむこともあったが、「歌」が終わってから授業が進むにつれて、教室から出歩き学校内を歩く様子が見られるようになってしまった。しかし教室にいる時は課題をよく見て集中して取り組んでいた。「分ける」活動では色を間違えて分けていても気がつかず、「あれ、T男これ違うよ。」と声かけを繰り返し、もう一度分けるように促してきた。野菜・果物カードも同様に行ってきた。すると少しずつ、分ける際に見本と比べる様子が見られるようになり、誤って分けたときは自分から気づき直すこともあった。

夏休み、家庭に「分ける」カード学習を持ち帰り、保護者と一緒に行った。保護者から「とっても集中して取り組み、気分がのっている時は、もう一度と手を引っ張られ催促されることもあった。」とうれしい知らせが届いた。

学校や家庭で繰り返し行うことで活動への見通しをもち、保護者と一緒に落ち着いて取り組み要求のサインを出したこと、また1学期の終わり頃から文字カードをしっかりと見るようになり、3種類程度の文字カードを分けようとする様子が見られるようになったことを受けて、2学期からもこの活動を続けることにした。

2学期中頃からグループの始まりの「歌」で、体を大きく揺すり声をあげ、今までよりも活動的に「歌」を聞くようになった。時には「歌」の合間にギターを触りに行き、まるで「はやく、歌を聞かしてよ。」と催促する



「これは、これかな？」

ようにも見えた。教師と歌に合わせて手拍子を打つこともとても喜ぶようになった。

同時に「歌」の後、教室からよく出歩くようになった。私たちはT男が気持ちを落ち着かせられる居場所を求めているのでは、と考え「憩いの部屋」という教室を作り、T男とのコミュニケーションをとるチャンスととらえた。この部屋でCDデッキから好きな童謡を聞ききながら静かに気持ちを落ち着けるようにと考えた。T男が教室から出歩く際に「憩いの部屋」へ一緒に向かったり、自分の気持ちを伝えられるようにと写真などのコミュニケーション手段を提示したり、T男との気持ちのやり取りを大切にしてきた。

「憩いの部屋」が気持ちを落ち着かせる場所となったようで、教師の手を引くなどのサインを出して部屋へ向かい、音楽を聴くようになった。CDデッキのスイッチをすぐに教師が押していたが、日を追うごとに自分から押したり、部屋から出てきて教師に「スイッチ押しして」とサインを出すようにもなった。しばらく部屋で童謡を聴くと落ち着くようで、教師の「おいで」という声かけや時には自分から、教室へ戻り落ち着いて課題に取り組むようにもなった。

「片づけ」活動では、ズックやスリッパ、そして干してあるランチョンマットなどを見ただけで活動内容がわかったようである。教師が声かけをしなくても自分からズックやスリッパを片づけたり、ランチョンマットを取り込んだりするようになった。特にスリッパの片づけでは、教師が他の生徒について行きその場になくても、スリッパを自分で片づけ教室に向かう姿が見られ、とてもうれしく感じた。

② Y男について

Y男もまた音楽が好きである。特にリズム感のある曲には腕を振ってそのリズムを上手にとるほどである。また探索行動が好きで、いろいろな場所に出かけて行き、そこで興味のある物には自分から触っている。時にはエアコンのつまみを取ったり分解することもある。子ども同士ではなかなか遊べないが、大人とであれば、してほしいことを要求し遊ぶこともある。

「歌」では調子の良い時などは、椅子から降りて歩きながら腕を振ってリズムをとる様子も見られたり、好きな曲を毎回選んでいたりもした。「歌」に合わせて黑板に書かれた



「水たまったかな？」

絵の上にマグネットを1つずつ貼っていく学習では、当初、教師が黑板いっぱい絵を描いてみたが難しかった。そこでY男目の高さに一線に並べて描くと視野に入り集中ができたのか、貼っていくようになった。その後、繰り返し行い、絵を散らして描いてもできるようになった。

「分ける」では初めは学習に集中することが苦手であった。4枚のカードのうち1枚目を置く時には間違いもあるが、2・3・4枚とカードを置いていくうちに、本人も

やることを理解して間違えないようになっていった。

履き物の「片づけ」では、教師の手本は両方そろえて履き物入れに入れていた。しかしY男だけは最初に片方ずつ入れ、その後でもう片方のペアを探しながら入れていった。自ら考え、とった行動である。また干してあるランチョンマットの片づけでも、持ち前の手先の器用さを利用して、とめてある洗濯ばさみをととても素早くはずして、ランチョンマットを取り込んだ。それに雑巾を洗う学習では、中学部の各クラスの雑巾をさっさと集め洗濯室へ行き、自分から洗濯槽に雑巾を入れスイッチ類を触り始めた。細かい点では教師の支援は必要だが、水が回る様子をとでもうれしそうに見つめていた。そして洗濯機が止まると、何も言わなくても雑巾を取り出し脱水槽に入れたのである。

「遊ぶ」では初めて手作り玩具を見せ誘った時には嬉々として遊ぶ姿が見られたが、回数を重ねるとあまり興味を示さなくなった。しかし教室に置いてあるチョーク・マグネット・ペンなどの散らかし遊びが大好きで自分から行っている。特に怒った時などはこの遊びをすると気分もすっきりするのか、その後、教師の「片づけようね。」の声かけで、ちゃんと元の場所に戻し片づけるのである。

(5) 考察

当初、教室内で落ち着いて学習が行えるようにと、教材や活動内容を工夫してきたが、生徒にとっては教室は活動範囲が限られ狭いものであり、活動内容が生徒の興味を引くものではなかった。そのため教室外へと生徒の関心が向かってしまうことが多かった。しかし事例からもわかるように、教室内外を問わず自分から見つけた面白い活動や見てすぐにわかる活動には自分から取り組み、集中して行うこともあった。

「歌」は生徒の好きな活動の一つで、やはり始まりの合図としても定着している。生徒がなかなか集まらない時も、ギターを弾くと生徒が集まったり、それぞれの好きな聞き方で「歌」を聞いたりしている。少しずつ絵をじっと見たり、同じ絵を選んだり「歌」を選ぼうとする姿も見られるようになった。

「分ける」活動は生徒がこれまでも繰り返し行ってきており、提示しただけですぐに生徒は何をすることがわかり取り組むことができていた。T男のように、何度も分けるうちに少しずつカードを見比べ、試行錯誤する様子も見られるようになった。しかしカードは生徒の生活の中であまり身近なものではなく、生活にあまり根付いていなかったようにも思われた。そのため関心が教室外の方へ向くことが多々あった。

一方「片づけ」活動では実際の場所へ行き、日常使っている身近なものを分けながら片づける。さらに「片づけ」そのものもよく取り組んでいる活動ということから、生徒は見ただけで何をすることがわかっているようであった。カード学習よりも関心を示し、集中して自分から行う姿も見られた。実際の場所でいつも使っているものや身近なものを取り扱う生活の流れにある活動は生徒にとってわかりやすく、見通しももちやすいようだ。

「遊び」では生徒に教室外での活動をも認めてきた。そのことで、生徒の表情も豊かになり、教師に「お茶がほしい」「スイッチ入れて」などの要求を出すようになってきた、と感じている。さらに気持ちを発散するだけではなく、気持ちを落ち着かせる時間となり

生徒にとってはよい時間となっているようだ。

まだ「片づけ」活動が生徒に定着しているわけではないが、「片づけ」には「遊んだ後の片づけ」、洗濯には「水を使う」「機器の操作」など生徒の好きなことにつながっている部分もある。そこから生徒にとって「片づけ」活動が楽しいものとなり、自分から教師に要求したり、積極的に取り組んだりする姿がでてくると思われる。また活動にも見通しをもって自分から取り組めるようになっていくと考えた。私たちはそういう活動を大切にしていかななくてはいけないのではないかと、そこから学習が始まると考える。

(今井康弘 岩沼見奈)

事例 6 国語・数学「～さわって、あそんで（文字や数字に親しもう）～」

(1) 生徒の実態

本グループは、1年生1名、2年生1名、3年生3名の計5名の生徒で構成され、週に4コマある時間を3人の教師が担当している。今までも文字や数字については学習してきたが、どの程度理解しているのか評価しにくい面がある。また子どもたちにとっても、生活やコミュニケーションの場に生かせない菌痒さがあるように思われる。

学習課題への取り組みは、すぐに自分から始めることのできる生徒もいれば、しばらく時間を要する生徒もいる。また、課題を早く終えては「次は？」と言う生徒もいれば、1課題を終える度に休憩に入る生徒など、5人5通りのペースやプロセス、アプローチが必要な子どもたちの集団である。

(2) 教材観

文字や数字に慣れ親しむことによって、毎日が楽しくなる。学習意欲にもつながる。そんな経験をどうやって積み上げることができていくか考えたとき、自分の専門分野を生かそうと思った。試行錯誤しながら、いろいろなものを作ってみた。

教材教具として作ったものは、子どもたちにとっては「玩具」であっても良い。目や手を協応させて操作しながら繰り返し「遊ぶ」うちに、自然と文字や数字等を覚えてくれることを願っている。自分で自由に始めて、自分で学び、できたときの喜びや達成感を体験することで、自己評価することもできる。また、置いておくだけで何をすれば良いのかわかるので、ほとんど指示や言葉かけをする必要はなく、騒がしいことの嫌いな生徒のことも配慮できると考えた。

(3) わかる状況づくり

休み時間、それぞれの場所で過ごした生徒が集まってきて「この教室で何をするのか」見て、すぐにわかってもらえればと、あらかじめ机の上にいろいろな教材を並べておくことにした。ある時は、生徒の名前をわざと未完成のままに並べておくこともある。商標やロゴ文字が好きな生徒には、看板を写真に撮ってきてそれを置いておいたり、前時の授業で時間が足りずにやりかけになっていたものなども準備しておくことにした。教室に来た